

発達段階

高校生の発達段階としては、下記の段階といえる。

1. 身体性の発達(小学1～2年生頃)
2. 関係性の発達(小学3～4年生頃)
3. 抽象性の発達(小学5年から中学1年頃)
4. 社会性の発達(中学2年から高校生)

性の課題

高校生時期に表出する性の課題の主なものを記す。中学生時期と重複する課題が多いが、性交開始年齢期であり、性行為に起因する課題が多くなる。

児童ポルノ被害
 性虐待
 性被害(インターネット関連含む)
 性加害
 “性と心”への対応
 性交等の性行為
 思いがけない妊娠
 性感染症
 デートDV

臨床の観点

個別指導・個別支援

高校生における性の課題は、性行為に関連する課題が目立っている。そしてそれらは、インターネットを介した関係の上に成り立っている場合がある。

本来、高校(学校)は社会の荒波から子どもを守る役目、すなわち抛り所でもあるのだが、これらの課題を抱える生徒は、就学継続が危ぶまれる状況になりがちである。

また高校は義務教育期間ではないので、不登校も含め学校に行っていない子どもも存在する。その場合、支援のルートはかなり限られている。

思いがけない妊娠の際、保護者の受容がある場合には、出産する子どもたちが数割存在する。その後は、育児に進むわけであるが、地域の保健福祉機関(子育て包括支援センター等)と情報を共有しながら支援にあたっていく。保護者の受容が無い場合をはじめとして、特別養子縁組に進む場合もあるが、精神的なケアが必要になる。

中学生時期と同様、人工妊娠中絶に至る場合には、臨床指導が将来に影響する可能性が高い。同じ轍を踏まないための柔軟な指導や具体的な方法のアドバイスが必要である。

集団指導・小集団指導

「知識モデル」からみると、高校は入試を経ている関係もあり、生徒の知識運用能力のばらつきが小さい。知識を基盤とした論理的な話を進めることができる高校もあれば、「知識モデル」ではない”本当の言葉”によるやりとり(中学生の項を参照)を進めることもよいだろう。性の課題に関するリスクグループも学校が把握できていることが多いので、その生徒たちを抽出して小集団での性教育を展開することも効果的である。

高校では意識や態度を変えるのみならず、行動を変容することを目標としたい。

学校では何が教えられているか

学習指導要領解説(平成30年)をみると家族計画について学ぶことになっている。

【結婚生活と健康】

結婚生活について、心身の発達や健康の保持増進の観点から理解できるようにする。その際、受精、妊娠、出産とそれに伴う健康課題について理解できるようにするとともに、健康課題には年齢や生活習慣などが関わることについて理解できるようにする。また、家族計画の意義や人工妊娠中絶の心身への影響などについても理解できるようにする。また、結婚生活を健康に過ごすには、自他の健康に対する責任感、良好な人間関係や家族や周りの人からの支援、及び母子の健康診査の利用や保健相談などの様々な保健・医療サービスの活用が必要であることを理解できるようにする。

なお、妊娠のしやすさを含む男女それぞれの生殖に関わる機能については、必要に応じ関連付けて扱う程度とする。

健康課題と年齢の関連が記されている。つまり「妊よう性」について踏み込む表現になっている。年齢や生活習慣に影響を受けることの理解が求められている。

平成31年度の教科書(大修館)を見ると、避妊法としてあげられているのは(男性用)コンドームと低用量ピルであった。また、コラム「不妊問題」で妊娠には適齢期があることが記載されている。

一方、性感染症(エイズ含む)については、高校の保健の授業で学ぶことになっている。そこでは予防だけでなく、「その原因、及び予防のための個人の行動選択や社会の対策について理解できるようにする」と記載されており、生徒の社会性の発達とともに、社会を構成するメンバーとしての考え方を伸ばしていくことになっている。

なお、保健の授業は、原則として1年生及び2年生で学ぶことになっている。

【参考文献】

1. 松浦賢長(編著):ワークシートからはじめる特別支援教育のための性教育. ジアース教育新社(東京), 2018.
2. 荒堀憲二, 松浦賢長(編著):性教育学. 朝倉書店(東京), 2012.
3. 文部科学省:小学校学習指導要領(平成30年告示)解説 保健体育編, 2018.